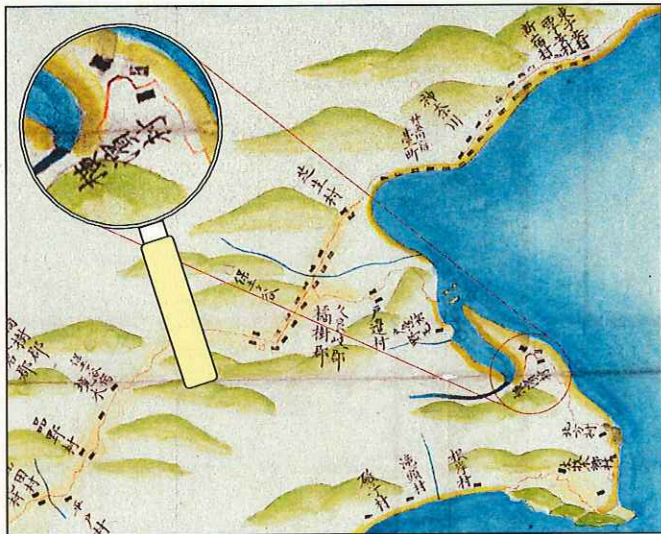


幕府が用意した開港の地 - 横浜 -

江戸時代の終わりに近い安政6年(1859年)、外国船に開かれた港が作られました。“日米修好通商条約”にもとづいて幕府が用意したのは、東海道の神奈川宿(神奈川湊)から外れた対岸の小さな漁村であった横浜でした。開港は、横浜村のその後を一変させました。江戸時代に浅瀬を埋め立てて新田開発されたところは外国人居留地として近代都市に生まれ変わり、日本で最初の鉄道が新橋・横浜間に開通したのをはじめ、日本の近代化はここから始まりました。

それから150年、街道から外れた寒村にすぎなかった横浜は、国際都市として発展を続け、いまや大阪・名古屋を抜き、東京に次いで人口の多い大都市となっています。

伊能図に描かれた開港前の横浜周辺



現在の横浜中心部



2007年撮影

日本初の鉄道開業の終着駅から日本の大動脈の中間駅へ... 移転を繰り返す横浜駅

横浜駅はJRのほか京急・東急・地下鉄など6社が乗り入れ、JRだけでも1日平均40万人以上(2012年)が乗り降りする大きな駅です。この横浜駅、実は3代目(3ヶ所目)となる駅で、明治5年(1872年)新橋・横浜間に鉄道が開業した時の横浜駅は、開港地に近い現在の桜木町駅のところでした。その後、東海道本線の延伸・直線化にともない一度は本線上から外れますが、横浜への乗り換えの不便を解消するため、大正4年(1915年)に本線の経路を横浜中心部より近い方に変更し、高島町付近に横浜駅を設置しました。さらに昭和3年(1928年)に、東京と関西方面の間の時間短縮をはかるため、再び明治時代終りごろの直線ルートに変更になると、その本線上に位置する現在の場所に移転しました。



展示室の中央「平台」に横浜に関連した「伊能図」や「迅速測図原図」などを展示しています。そちらも合わせてご覧ください。

地図で見る横浜

【御開港横浜大絵図 完】

“御開港横浜大絵図”（※“御開港横浜之全図”）は江戸時代末から明治時代にかけて活躍した浮世絵師“貞秀（＝地図絵師：橋本玉蘭斎）”が描いた開港間もない横浜の鳥瞰図です。図の手前の子安村から横浜を鳥瞰し、右上には富士山、左手には房総半島の富津岬が書き込まれています。図の中央には堀に囲まれた横浜開港場が配置され、二つの突き出した波止場の間に運上所（貨物の取締りや関税の徴収を行う役所）が見えます。

この図は人気があり版を重ねて刊行されており、国土地理院所蔵の図もその中のひとつです。たとえば「横浜開港資料館」が所蔵している「同図」とくらべてみると、元町周辺が水田から人家の密集地に変わっているなどわずかの間の急激な経年変化が見て取れることなど興味深いものです。

【迅速測図原図】

“迅速測図原図”は、明治時代に全国測量の第一歩として、縮尺2万分1で作成された平板測量原図です。正規の三角測量成果によらない迅速測図法によって、皇居富士見櫓を中心として明治13年（1880年）から測量が開始され、明治19年（1886年）までの間に関東地方の約900面が作図されました。

この測図原図は彩色を加えられた色彩豊かな図となっています。また、原図によっては図郭外に目標物のスケッチ（視図）がそえられているため、当時の景観をよりうかがい知ることができます。

展示の図は、明治15年（1882年）測量の“神奈川県武蔵国久良岐郡横浜区”とこれに隣接する区域の図で、開港からおおよそ20年、明治5年（1872年）の新橋・横浜間の鉄道開業から10年後の横浜の街が表現されています。

【伊能大図 彩色図】

“伊能図”とは、伊能忠敬が寛政12年（1800年）から文化9年（1816年）にかけて全国を測量した成果に基づいて作成された“大日本沿海輿地全図”のことです。大きく分類すると、①大図（縮尺1/36000、214枚で全国をカバー）、②中図（縮尺約1/216,000、8枚で全国をカバー）、③小図（縮尺約1/432,000、3枚で全国をカバー）とその他の図からなります。

展示の図（複製）は、「大図」のうち横浜から三浦半島・相模川下流域一帯を表した「武威 神奈川 相模 馬入川 城ヶ島」で米国議会図書館所蔵図のデジタルデータから国土地理院が彩色復元作業を行ったものです。

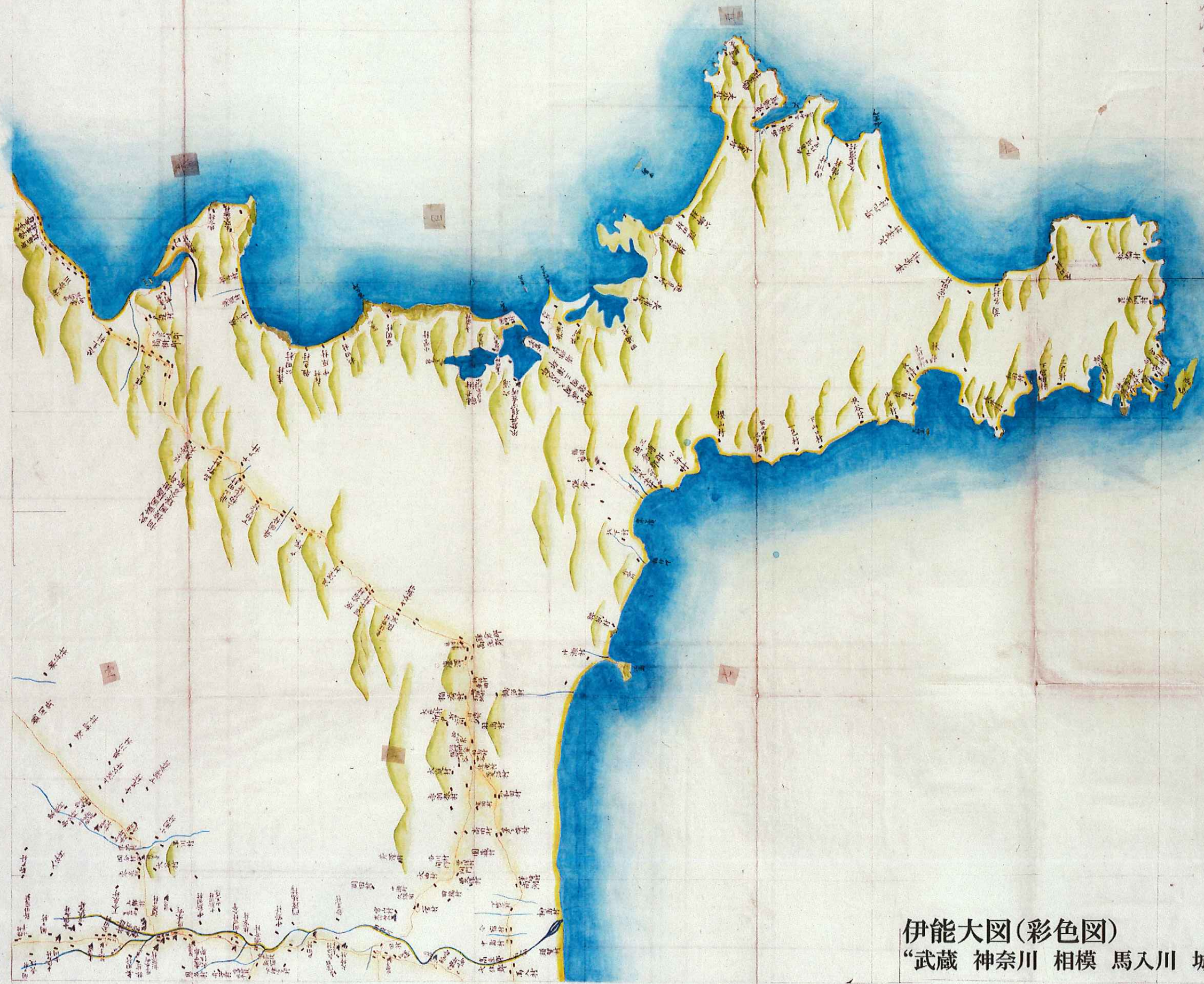
【1万分1地形図】

大正11年（1922年）に測量された「1/10,000 地形図」の“横浜”です。2代目となる高島町付近の横浜駅が表示されています。当時の横浜駅の東側の広大な貨物駅跡が、現在の“みなとみらい地区”の一角になっています。

【1万分1地形図】

昭和4年（1929年）に修正された「1/10,000 地形図」の“横浜”です。横浜駅が現在の場所に移転して間もないころの様子が表されています。駅の移転に伴い工場跡が空き地になっているところも見られますが、現在は高層ビルが立ち並ぶ駅周辺も、まだ埋め立てられていない海面が貯木場に使われていたりしています。この当時の開発は低地が中心で、周辺の台地にはまだ手付かすのところが多く残っています。

跡 池澤
馬入川
神奈川
武蔵



伊能大図(彩色図)
“武蔵 神奈川 相模 馬入川 城ヶ島”

1 地 义

橫濱

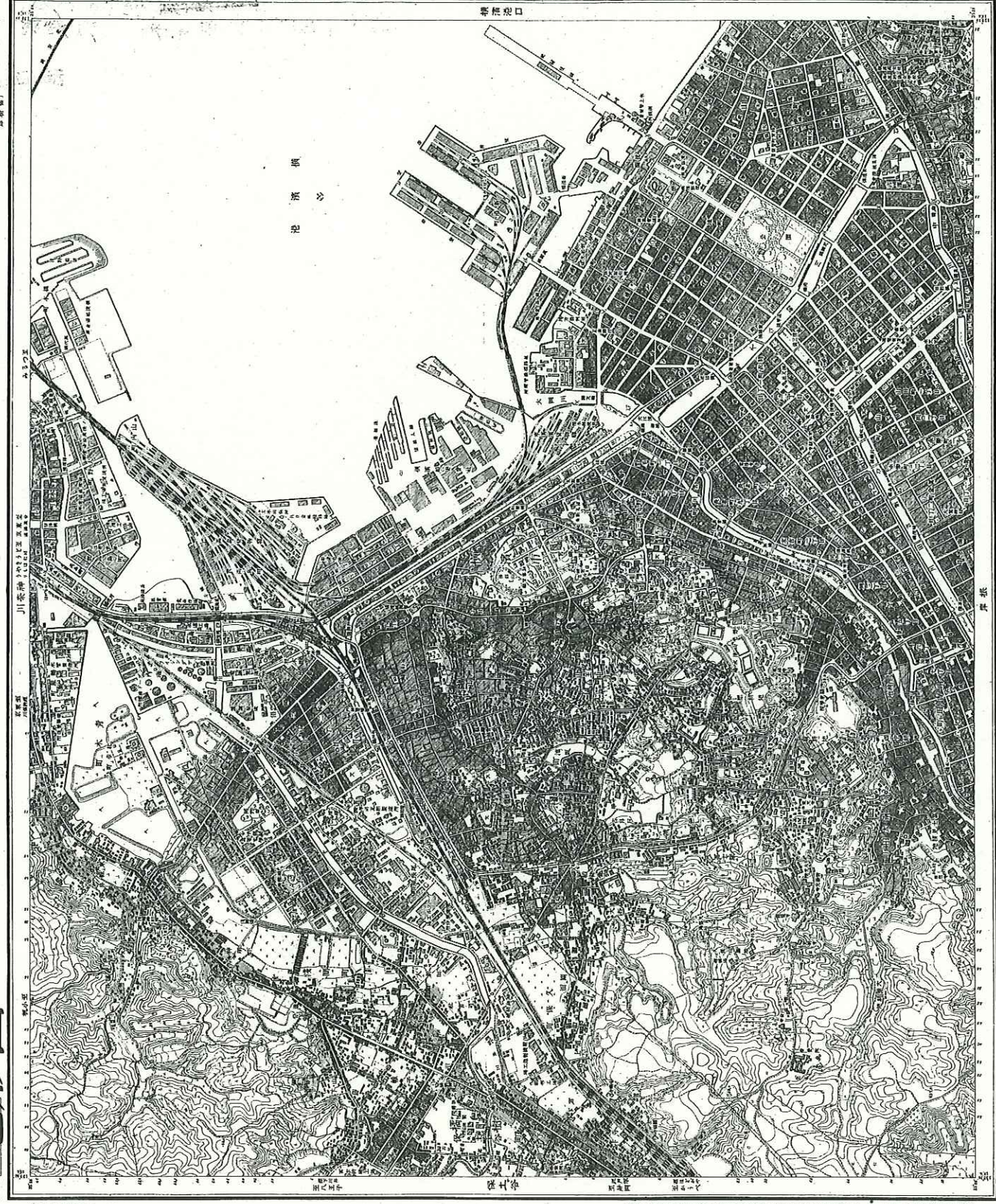
大正二年

1. 姓名: _____ 2. 性别: _____ 3. 年龄: _____
 4. 职业: _____ 5. 学历: _____ 6. 籍贯: _____
 7. 婚姻状况: _____ 8. 健康状况: _____
 9. 兴趣爱好: _____ 10. 自我评价: _____

11. 家庭成员: _____
 12. 社会关系: _____
 13. 工作经历: _____
 14. 教育经历: _____
 15. 其他事项: _____

16. 备注: _____
 17. 日期: _____
 18. 签名: _____

19. 审核人: _____
 20. 日期: _____

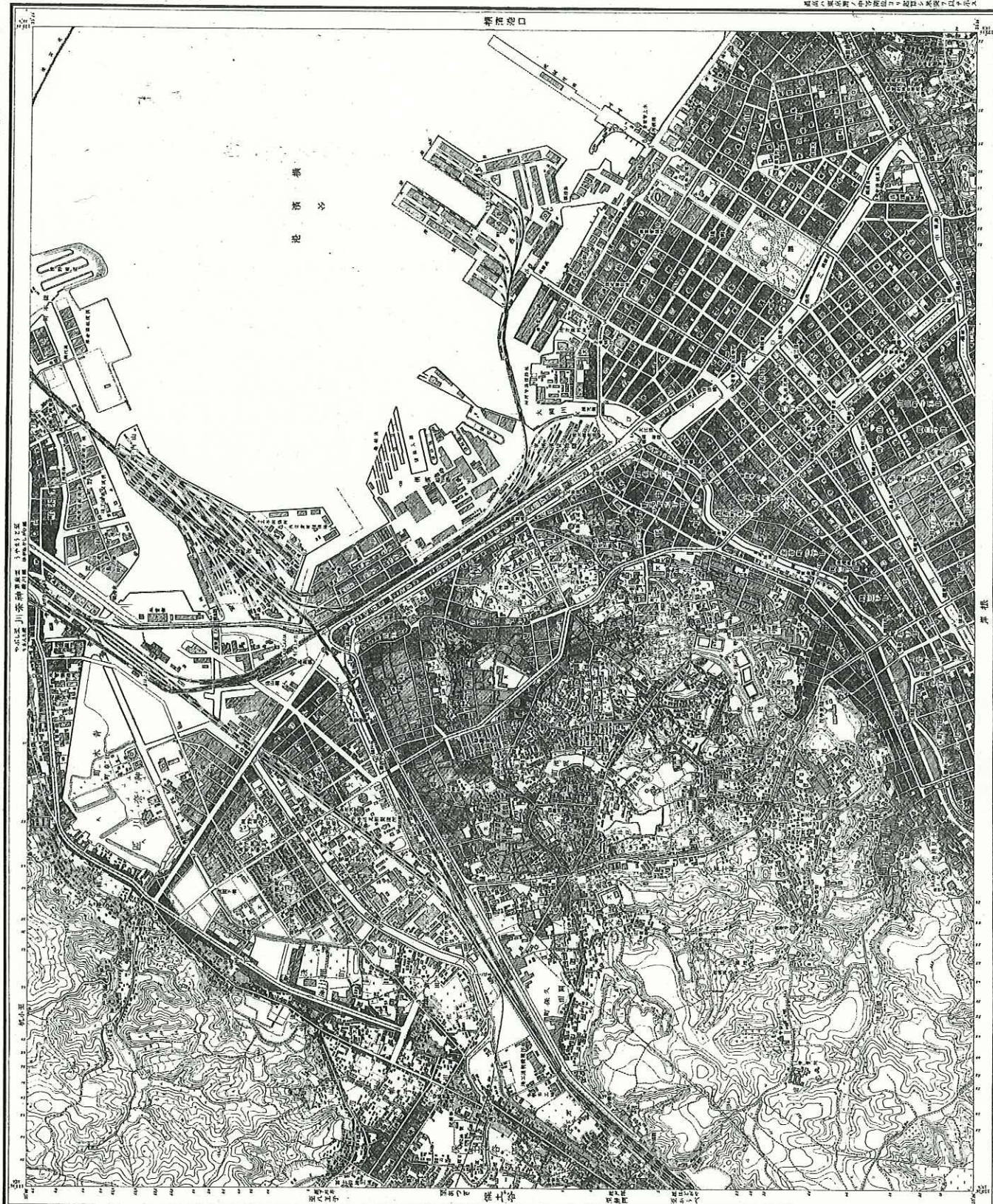
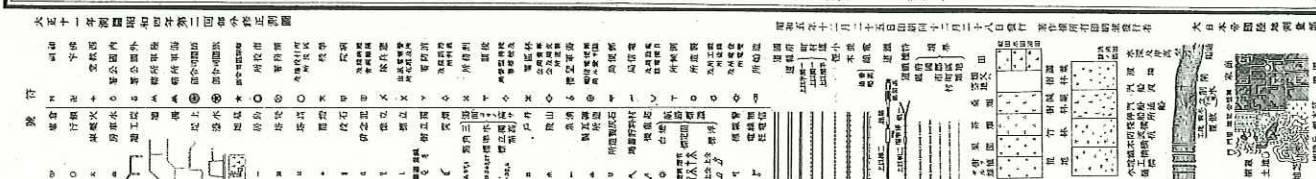


長江の治水

庫振

昭和4年

花生	川榮牌	花生
白米		白米
水	神供	水



現金價格

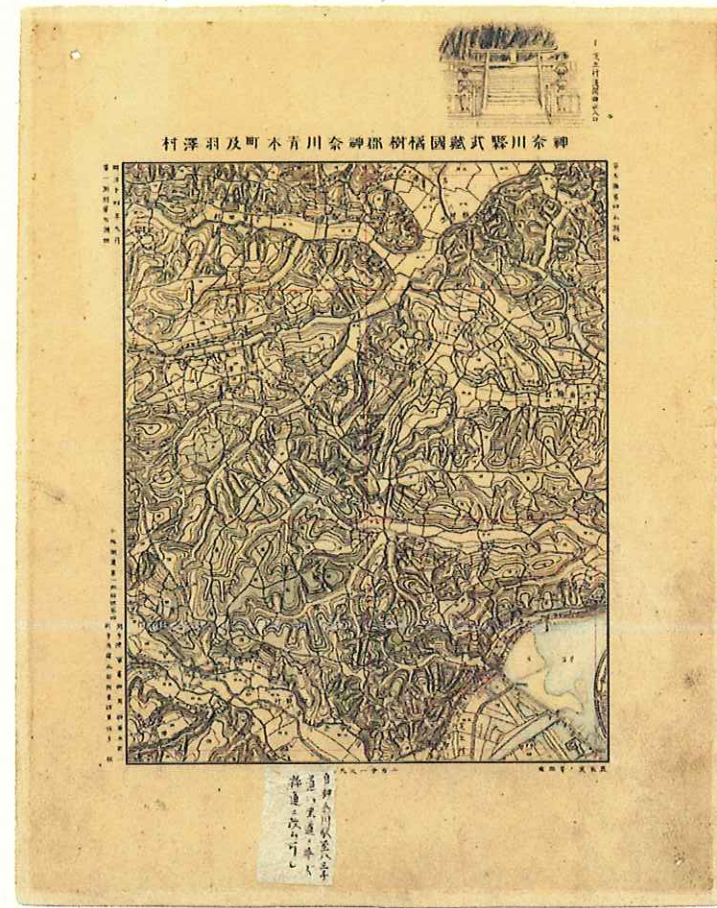
根

御開港横浜大絵図 完

御開港横浜大絵図 全圖

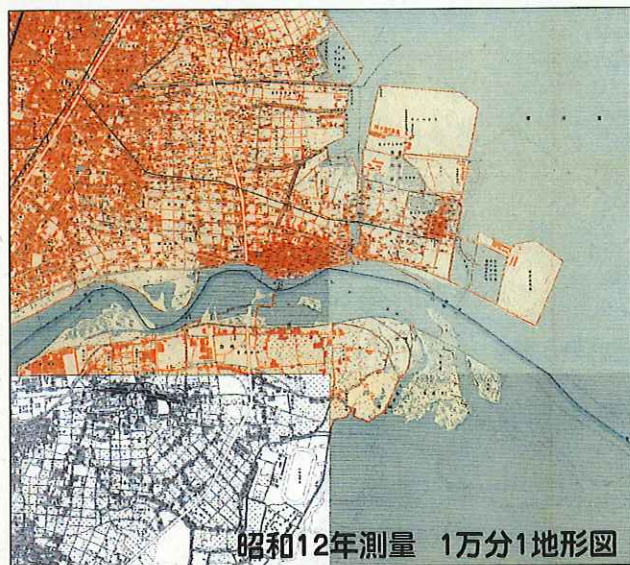


迅速測図原図



日本の空の玄関

羽田飛行場から東京国際空港へ



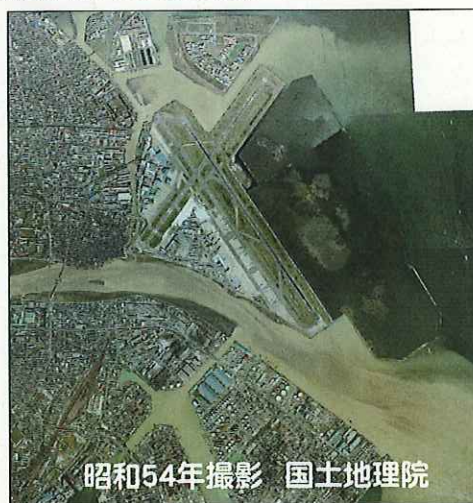
昭和12年測量 1万分1地形図

羽田飛行場は、昭和6年(1931)に日本初の国営民間航空専用空港東京飛行場(羽田飛行場)として開港し、その後の戦時下では、軍用飛行場として利用されていました。



昭和21年撮影 米軍

終戦後、米軍の管理下に置かれていましたが、昭和27年(1952)に返還され、同時に東京国際空港と改名し、わが国の空の玄関口として再出発しました。



昭和54年撮影 国土地理院



平成4年撮影 国土地理院

昭和50年代になると、新規乗り入れや地方路線の増加に伴い空港施設の拡充が望まれました。また、昭和53年(1978)には成田国際空港が開港し国際線が移転した後も国際線の増便が続き、空港施設として限界を超えてしまいました。このため、東側の沖合に滑走路の拡張を行っています。



平成22年撮影 国土地理院



平成18年測量 2万5千分1地形図

オリンピック開催予定で注目の 豊洲エリアも少し前までは海の中



明治13年測量 1万分1迅速図

明治13年測量の地図は、河口の姿や干潟の様子が見てわかります。



昭和20年測量 2万5千分1地形図

昭和20年頃になると、東京湾の北部では大規模な埋立てが始まりました。



昭和44年撮影 国土地理院

昭和40年代になると、埋立てが西側にも広がっています。



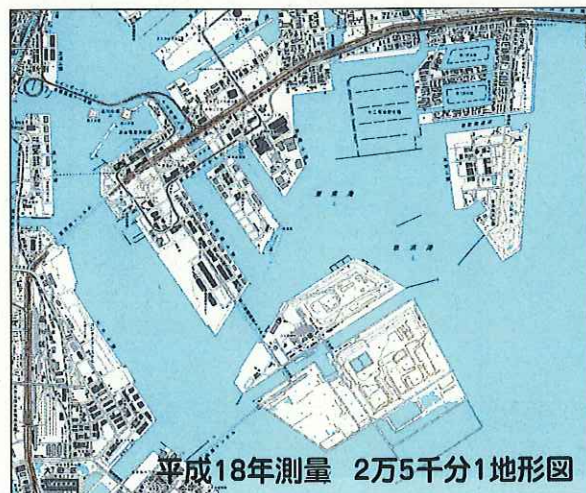
昭和50年撮影 国土地理院

昭和40年代に東京湾北部の埋立てがほぼ終了しています。



平成18年撮影 国土地理院

明治期から平成にかけて埋立てが行われ、豊洲エリアが完成しました。



平成18年測量 2万5千分1地形図